

イナリワン友人帳

まるやま とうこう
円山 東光

受賞のことば

大好きな馬イナリワンのエッセイが次席の栄誉を賜り、大変嬉しく存じます。実は、脱稿後密かに手紙を感じて居りました。「次は、グランプリー」など大望を抱かず精進を重ね、機が熟せば再度挑戦したいと存じます。末筆乍ら拙文をご拝読頂いた選考委員の先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。本当に有難うございました。

プロフィール

競馬歴まもなく40年。その間、帯封弘辰歴4回。但し、近年は馬券絶不調の為、辛うじて枠連のバラ券を楽しんでいるアラ還です。新しい記憶は消え、古い記憶が鮮明と言う老化現象と日々格闘中！

平成元年4月28日。客室乗務員の元彼女から呼出を受ける。復縁の淡い期待を抱き向かった羽田の喫茶店。だが、其処に彼女の姿はなかった。「結婚決まったみたいだよ。」馴染みの店主から大きめの紙袋と封筒を渡された。袋の中身は恐らく消去したい私との想い出達だ。冴えない春の天皇賞前日だった。

気の抜けた私は、店置き夕刊紙を取り天皇賞の予想を始める。すると、右袖に何やら気配を感じた。一瞬彼女か？と期待したが、視線の先には、愛らしく微笑む少女がいた。

「イナリワン！」新聞一面に書かれている馬名を彼女は読み上げた。

「この馬は手が付けられない程強いって父さんが言っていた。出でないけど、ロジータも負けないよ」

何れも南関東競馬のGI馬でミルジョージ産駒。子供なのに渋い所を突いて来ると思った。やがて私に迷惑と感じたのか、母と思しき女性がやって来て少女は奥の方へと追いやられた。どうやら店の身内らしい。

「父親が地方競馬の調教師でね。馬に詳しいんだよ」店主がぼつりと言った。

予想を進めると、少女が口にしたイナリワンと言う五文字が脳裏にちらつく。そして馬券の検討が進まない。鞍上はデビュー三年目で破竹の勢いの武豊騎手。ゲートは、平成元年に相応しい一枠一番。馬柱から新たな時代

への期待感が充滿している。加えて馬名の由来もユニークだ。イナリは、此処から直ぐの羽田穴守稲荷神社。ワンは、正一位稲荷大明神。夕刊紙の小ネタが馬券予想の決め手となった。あの少女を神の遣いと信じ馬券はイナリワンの単勝と枠連総流しにした。

レースは、二周目の四コーナーからイナリワンの独走状態。武豊騎手が手綱を抜く度、後続との距離は離れていった。これが手の付けられない強さと言う奴か。小柄な鹿毛馬は私の心を鷲掴みにして行った。

続くGI宝塚記念も連勝。迎えた秋緒戦は毎日王冠。鞍上は、名手柴田政人騎手に変わっていた。其処で繰り広げられた人気馬オグリキャップとの激走は、ハナ差と言うより微差と呼ぶのが相応しい決着。この疲労が尾を引いたのか次の天皇賞は、オグリと共に三強と称されたスパークリークに惨敗した。久々に弾けないイナリワンであった。

次は同じく東京開催のジャパンカップ。同期入社ではイナリワンのファンとなっていたH君は応援に府中へ行くと言った。このレースには、川崎よりあの少女が言った名牝ロジータも参戦する。私にとって、現地観戦は不可避の一戦だ。然し、当時の私は土日勤務でしかも繁忙期。已む無く観戦は断念し、H君に想いを託す事にした。因みにロジータとは野百合の品種であると言う。その韻律は、あの日見た素朴な少女の面影に重なった。

「お前と、ちびロジータちゃんの想いは受け取った」H君は電話越しに震える声で言った。

だが、彼に託した想いは競馬場で響かなかった。レース当日、彼の顎下は水囊の如く極度に腫れ、高熱も出た。それで、立川の病院に緊急入院する事になったのだ。

知らせを受け、駆けつけた病室。其処に有る小さな備付テレビで二人は、レースを見た。GI連闘で臨んだオグリキャップが人気薄の招待馬ホーリックスとデッドヒートを演じた。時計は、破格のレコードタイムだった。

私達が応援したイナリワンも、そして彼を鼓舞する為に参戦したと想われたロジータも、実況される事なく後方でゴールした。「俺が応援に行けなかったせいだ。」H君は呟いた。

その師走。私は久々、羽田に行った。穴守稲荷に参拝するためだ。元彼女と何度も門前を通り過ぎていた穴守稲荷だが、境内に入るのはこれが初めてだった。願掛けは二つ。中々病状が回復しないH君の早期復職と、スランプ気味なイナリワンの有馬記念必勝祈願だ。

「ねがひごと かならずかなふ 穴守の いなりの神よ いかに尊き」

手にとったリーフレットに書かれたその和歌が、やけに心強く胸に残った。

帰りは、ぼんやりと環八方向に歩を向ける。町工場や小規模な商店が目立つ街並。其処に突然、不釣合なブル

ーのグラスウォールが眩しい近代的建物が現れた。有名なゲームメーカーの本社だった。

有馬記念当日、休暇を取った私は、まずH君を見舞いに病院へと向かう。穴守稲荷で買った御守、来年の干支である馬の置物、そして所願成就すると言う御神砂を渡す為だ。しかし、担当ナースから彼は無菌室に移動した為、身内以外の面会は不可と謝絶された。無菌室とは何事だろうか。医療知識に乏しい私にでもその三文字に只ならぬ気配を感じた。

不安な気持ちを抱えつつ、私は立川の場外馬券場へ歩を変えた。馬券は、イナリワンの単勝だけ買ったが、枚数は二枚。片方は例年通りならば一緒に観戦する筈のH君の分だ。

ファンファーレが鳴って以降、私はずっと革ジャンの内ポケットに入れた穴守の御守と御神砂を握り締めていた。そして、3〜4コーナー地点でイナリワンが捲りあげていった時、御神砂を包んだ紙袋が手汗で破れ砂が弾けた。と同時に、鞍上の柴田政人騎手とイナリワンの眼光が煌めき、その視線は勝者だけが知る道を捕らえた様に見える。其処からのイナリワンは強かった。テレビの画面さえ霞む豪雨の中、レコードタイムでゴールを駆け抜けた。暫し途切れていた手の付られない強さだった。喜びの美酒に浸る束の間、H君のお母様から連絡を受けた。医師より、骨髄性白血病と宣告された。ただ絶句した。

1997年。インターネットが普及し始めた頃、私は再び羽田とご縁が出来る。不思議な何かの力に導かれた様に、穴守参拝の際に目に留まったブルーの外壁が印象的なゲーム会社に転職したのだ。

そして2007年12月28日。私は入社10年の節目を迎えた。驚く事に、この日大井競馬場にイナリワンが凱旋する。駆け付けて当然だが、嘗てのジャパンカップ同様、観戦に一つのネックが発生した。移動先部署

との顔合わせを兼ねた納会である。入社当時、将来の主力事業と持て囃された私の所属チーム。それが、不採算部門となり解散が決定し、部員は他部署に分散する事となった。状況から、会への欠席は許されない。しかし、前回の轍を踏まず私はイナリワンを優先する事にした。これが彼を見られるラストチャンスと感じたからだ。セレモニーを見届けた後で直行すれば、宴の半ばには到着出来る。それで体面は保てると思った。

続く会話から、彼女は気さくで人柄の良い女性である事が解った。ならば許されると、先程湧いた憶測を思い切ってぶつけてみた。

「君はあの時の少女なのかい？」彼女は首を振った。羽田に親戚はいないし、記憶にない出来事だと言った。そう話す彼女の横顔にあの少女に似た野百合の面影を見つめる。再び、私の口から唐突な言葉が零れ出た。

「ロジータちゃんと呼ばせて貰っていいかな？ 二代目になるけど…」

「ロジータは川崎の誇りだから光栄です」彼女は笑って承諾してくれた。

2019年。私は、独立して北海道でITコンサルタント。そして二代目ロジータちゃんは専業主婦になっていた。

その日、馬との距離が近い大井競馬場のパドックは人で溢れていた。横断幕も掛けられ明らかにイナリワン目当ての客が多かった。皆、私同様に色々な思い入れがある様だった。

イナリワンが大井在籍時の主戦であった宮浦元騎手(当時調教師)を背に入場するとパドックの興奮は最高潮となった。久々の競馬場の雰囲気興奮したのか、馬は鞍上を振り落とさんばかりに暴れる。悍性が強いと言われていたイナリワンの姿が垣間見えて私は、嬉しかった。そして、その馬体は前のレースを走っていた現役馬達より若々しく見えた。不意に目頭が熱くなり、私の口から有難うという言葉が零れた。同じ思いを大声で発している観客も多くいた。

「羽田の本社が解体されたよ…(泣)」

彼女から送られて来たSNSのメッセージに、写真が何枚か添付されている。環八を背にし、ブルーの建物が消えた様が記録されていた。更地になった場所は思いの外広く、夢の跡と呼ぶに相応しい寂寥感を呈している。

間髪なく二回目のメッセージが届く。それには穴守稲荷内にあるイナリワン関連の展示物が何枚も添付されていた。優勝レイ、ゼッケン、口取り写真。2016年に惜しまれつつ天に召された彼の足跡は、今も緑の場所に留められている。「後の人から急かされて、ゆっくり撮影出来なかった」彼女はそう註釈している。未だに斯様な根強いファンがいる。それは、彼が不同不二の存在だと言う証明に他ならない。

「拾って貰った部署の人間が立場を弁えろ」

大分遅れて到着した宴会場で私は、管掌役員から激しく叱責された。空いている膳を探すと末席近くに一つだけある。それは、これからの私の立ち位置を示している様だった。

「現在、地元企業のウェブサイトを構築中です。但し、社長が、紫とピンクの色調にこだわり、デザインが難航しています。イナリワンの勝負服の色。彼も又、ファンです」

右隣にいた派遣で来ていると言う女性が、空のコップにビールを注いでくれる。「残業ですか？」との問いに、「競馬場に行っていた」と答えた。彼女は笑って言った。

「今日は、大井ですよね」自然な応答に私は、驚いた。

「近況如何ですか？」で締められた彼女のメッセージにこう返信した。

「実家が川崎の厩舎なんですよ」

若しかしてと私は、思った。年頃から言っ、あの日のちびロジータちゃんかも知れぬ。

「ロジータちゃんと呼ばせて貰っていいかな？ 二代目になるけど…」